
バレッドストーリー

よっし～

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バレットストーリー

【Nコード】

N0425Y

【作者名】

よっし〜

【あらすじ】

『ホーク・トライアングル』

それは凶悪化し増え続ける犯罪を撲滅するために作られた政府公認の私設団体である、そこに所属する少年「龍崎啓介」、彼はとある任務である少女と出会った。

「死にたくないなら協力して」

「全く、泣けてくるよ・・・」

これは、二人とその仲間たちの、硝煙と銃声、そして絆の物語である

ブローグ

その日は、曇り空でまだ夜でもないのに結構暗く雨も少し降っていたと思う、

場所はある港のコンテナ置き場、俺は仕事でそこに来ていた。

目的地に着くにあたりそのコンテナ置き場を通らなければならないのだが、そびえるように高く積んである少しサビのついたコンテナのせいで道がまるで迷路みたいになってたのを覚えている、

目的の場所に着くと、そこにもコンテナがあつた、ただそれは積んであるそれらとは違っていた。

やや離れたところにあり、その上サビ一つ着いておらず暗証番号式のロック付きというかなりハイテクなものだったからだ。

俺は、暗証番号を解読する装置を使いすばやく解読すると扉を開けた。

・・・それが、彼女との出会いだった。

こう聞くと普通の出会いではないけど、さらに普通じゃないのはこの時、彼女も俺も、銃をお互いに向けていたということだ。

プロローグ（後書き）

始めまして、文章力が壊滅的ですが頑張って連載しようと思います。
誤字脱字の報告お願いします

第1話（前書き）

更新遅れてすいません、プロローグと一緒に出そうとしたのですが、あまり文が気に入らず大幅に改編しておりました。

このことをマグマフレ임氏から指摘してくださいました本当にありがとうございます。

第1話

龍崎啓介はまたあの夢を見ていた。
りゅうざきけいすけ

その夢は、自分と赤色の髪をしたポニーテールの少女が一緒にいる夢だ。

羨ましいと思う人がいるかもしれない、もっともその夢は二人とも銃を持ち命がけで敵と戦っている夢なのだが……。

夢にも関わらず銃を撃った反動や色々な物への肌触りが妙にリアルで、本当にそこにいるのではと錯覚するほどだ。

その夢で戦う敵は毎度おなじだ、リボルバーを持つテンガロンハットを被った笑い声のうるさい男、様々なナイフを使う長髪のロシア人、露出度の高いチャイナ服を着て左肩に蝶の刺青を入れた女中国人。とにかくそういった者たちだ。

そして、その戦闘は最後まで見ることができず必ず啓介が追い詰められて場面が移り変わり、また別の敵と戦うといった感じで構成されている。

しかし、夢の最後は必ずどこかのビルの建物の屋上で啓介は撃たれてしまう。

時間帯が曇り空で少し薄暗くなっているためか、撃った犯人は顔に影の様なものが掛かりしつかりと見るができない。

そして、その人物は啓介の近くにしゃがみこう呟き毎度夢が終わる。「ごめんなさい、こうするしかないの」

「ッハ!……はぁ……はぁ……はぁ」

夢から覚め啓介は壁に掛けてある時計を見る、時間は朝の5時だ。

「たく……週一だったとしても、こんな夢見ると泣けてくるぜ」
顔に手を当て啓介は、「はぁ」とため息をつく。

ベットから起き、寝巻から着替え、朝食を作りキッチンへと向か

う。

彼の住むマンションは、リビングとキッチンが直接つながっているタイプのものだ。

啓介は、リビングの真ん中に配置しているテーブルの上にあるリモコンでテレビをつける。

「ふーん、また未成年者の発砲事件か、まあ俺も銃を使っているから人の事言えんか」

と朝食の目玉焼きを焼きながら啓介は呟く。

ちなみに朝食のメニューは、目玉焼き、ご飯、漬物、味噌汁だ。

午前7時、ややあつて、朝食を食べ終え携帯のメールチェックをする。

どうやら朝食を作っているときにメールが来たらしい、件名は。

「げ、マイルズからだ」

内心ため息をつきながら悪友から届いたであろうメールを開く。

“ よお！起きてるか、お前の大親友のマイルズだ、しらせてえことか幾つかあったからメールしたんだ

まず一つ、今日の午後の任務は俺がつくことになった、ありがたく思えよ

そして二つ目……、昨日声かけた娘からデートの約“

削除ボタンを押した。

「さて、そろそろババアんとこにいきますか」

（さっきのメールは報告以外何もなかった、うん、なかった）

そう、思いながらリビングの本棚に置いてある辞書と「緋弾のリア」と「ブラック・ラ ン」、そして「龍がく」（なぜか本棚に置いてある）を取り出す。

それらの後ろには、壁に埋め込まれた金庫がある、金庫のダイヤルを回しロックを解除すると、中には愛用の拳銃「ベレッタM92F “タツカスタム”：ワイバ ン」を取り出す。

それを中に一緒に入っていたヒップホルスターに収める。

「さてと、行くかな」

啓介はベレッタと同じく金庫に入っていたシースナイフを腰に差し足早に玄関へと向かう。

リビングから玄関へと続く廊下への扉を開けると、振り返り本棚に飾ってある写真立てに「いつてきます」と、呟きながら。

写真には、幼き頃の自分と、戦いの術を教え、親のいない自分を引き取ってくれた今亡き美しい女師匠が写っていた。

場所は変わりここはとある組織の司令室。

「朝早くに悪いねえ」

部屋に入ってきた啓介に顔を向けず書類を書きながら詫びを入れる人物がそこにいた。年齢は50代〜60代、髪を後ろに束ねた女性である

「おい、詫び入れるきねえだろ」

軽くキレ気味に啓介は答える。

「まあ、いいじゃないか話を進めたいしね」

女性はやつと啓介のほうに顔を向けた、年齢からは想像できないほど鋭い眼をしていた。

「そうですね、バ……桜田司令」

「おい、てめえこそ人の事ババア呼ばわりしようとしたろ」

今度は女性のほうがドスのきいた声でキレ気味に答える。

この女性、桜田千代は「ホーク・トライアングル」という私設団体の団長だ、名こそ団体だが、そこに所属するものは皆彼女の事を司令と呼ぶ。

「つーかぶっちゃけ早く要件言ってくれませんか、普通よりも早い時間に来た理由を」

と言うのも、マイルズからのメールと一緒に「早く来い」という内容の留守録も入っていたからだ。

「それが目上に対する態度か、まあいいさ、今日来てもらったのは

……」

とデスクの中から書類を一枚取り出す。

「こいつだ」

「つて、今日午後にあるマイルズとの任務の書類じゃないですか、これが何です？」

「はあ」と桜田はため息をついた。

「今日マイルズは来ない」

「は？」

「だから、マイルズが任務を辞退した」

「なんで？」

当然の疑問をぶつけると、桜田はこめかみに青筋を浮かべ

「女と遊びに行くそうだ」

とドスの利いた声で答えた

「またっすか……」

啓介も内心あきれてしまった。

「てことはまた俺一人すかー？」

怪訝な顔をして言うのには理由がある。

彼らの行つミツションは大抵二人以上でおこなうのだ、一人で行けば危険なうえ有事のさいの動きに限界があるからだ。

「安心しな、現地にもう一人いるから大丈夫だよ」

「もう一人？日本本部からすか？」

「いや、アメリカの本部からだ」

桜田の返答にヒューと啓介は驚きのあまり口笛を吹く。

「ということ、まずは現地に行ってそいつと合流、そして任務を開始、終わったらそいつつれて戻ってきな」

「りょーかい」

桜田の命令に軽い口調で答える。

「そっぴや、誰何すかそいつ」

と啓介は疑問をぶつける、しかし桜田は不敵にツツと笑い。

「行けば、分るさね」

と呟いた。

司令室を出て啓介は、ハアとため息をついた。

「浮かない顔してますね、どうしたんですか啓介君？」

と茶髪のセミロング、肩からドラグノフを下げた少女が声をかける。

「ああ、ミカか、今任務終わったところ？」

「はい、要人の護衛任務ただいま終わりました」

ニコつと笑うこの可愛い少女、名前は川島ミカ「ホーク・トライアングル」に所属しており、ポジションはスナイパーに所属している（「ホーク・トライアングル」ではパーティ「4人一組のチーム」を組む時それぞれ決められたポジションにつく、ちなみに啓介のポジションは遊撃手^{スリッター}）。性格はやさしく、周囲からスナイパーって雰囲気じゃないといわれている、（ちなみにそれを言われると必ず泣きそうになりみんなあたふたする）補足だが結構胸がある

「ハア、そっちは一人でもできるからいいよ……、こっちなんかマイルズのバカが任務辞退して顔も見たことのない奴と任務やるんだぜ、もう泣けてくるよ」

ハア、と再びため息をつく。

「大変ですね、そうだ、私が一緒に行きましょうか！、今から桜田司令に声をかけていきますね！！」

とミカは司令室に行こうとする。

「いや、いいって、任務終わって疲れてるだろうし、それに何より今回の任務はどちらかと言えばスプリッター向けの任務だ、所属が違うから危ないよ」

と啓介はミカを止める

「そうですか……、分りました、けど気をつけてくださいね」
と再びニコつと微笑んだ。

「ありがとう、ミカに彼氏ができたらそいつ幸せもんだな」

「ふえ！！か、か、彼氏ですか！？」

ガチャンとドラグノフを床に落とす。

「か、彼氏、啓介君と一緒にご飯を食べたり、い、い、一緒に手をつないだり、映画見たり……」

と何やら妄想の世界に旅立ってしまった。

「お、おいミ力??」

「そ、そ、それから啓介君があんなこと言ってくれたり……ふ、ふふ」

とうとうへんな笑い声まで聞こえ始めた。

「じゃ、じゃあ俺、そろそろ行くな?」

「さ、さ、最後は夜景を背後に、き、き、き、キ!!……え、エへへ、エへへへへへ」

真っ赤にして頭から湯気を出して変な笑い声を出しているミ力を気にしながら啓介はその場を立ち去った。

1階にある入口から外に出て。

「ハア、行きますか」

と今日で何度目かも忘れたため息をまたつきながら、任務の開始場所である港に向かった。

廃ビルの多い町の中ふと啓介は空を見上げた。

先ほどまで晴れていた天氣が、どんどん曇っていった。

第1話（後書き）

あれ？プロローグまでいくはずだったのに・・・

次回はいけるよう頑張ります

誤字脱字、感想の報告をお願いします

第2話（前書き）

今回プロローグまで行けたけど、強引だった気がする……

第2話

曇天の空の下、無数のコンテナが積み重ねられている港の一角、数十人の男たちがコンテナの中に沢山の木箱を積んでいた。

「今回はこいつらを運べば良いんつすね」

体格のいい体に、頬にドクロの刺青を彫った金髪の若者が自分の後ろにあるコンテナに体を向け尋ねる。

「ああ、いつもご苦労だな、報酬はいつもより倍払ってやる」

「おお、ありがてえ、いつもありがとうございます、旦那」

ドクロの男は話し相手の男に頭を下げる。

「なあに、気にするな、今回のブツはかなりヤベ　からな、運ぶ際は細心の注意を払えよ」

「分ってますって……　ところでこの木箱は一緒に積まなくていいんですか？」

ドクロの男は自分の左隣にある木箱に指を指す。

「そいつは俺からお前へのプレゼントだ、中見てみる」

ドクロの男は木箱のふたを釘抜きで開けると。

「こ、こいつは……　ほ、ほ、ホントにくれるんですかい!？」

「まあな、お前の下の中が使ってるようなトカレフや水平二連装ショットガン（・スパルタン）とは違ってかなり半端ないぜ」

ニヤリと相手の男は笑う。

「た、た、た、大変だ!!」

ドタドタと少し太ったスキンヘッドの男が走ってきた。

「うるせえな!!　いま大切な話し中だ」

ドクロの男がスキンヘッドに怒鳴りつける。

だが、そんなことをしている場合ではないとも言つような勢いでスキンヘッドは言い続ける。

「み、見張りをしていた仲間が全員やられちゃってるんだ!!」

「な、なんだと!？」

周囲の作業をしていた男たち、そしてドクロの男は驚愕した、なぜなら彼らのこの活動は警察にも嗅ぎつけられていないうえ、銃の武装もしているのではかのギャングチームが襲いに来ることもない、そのうえ見張りの数は5人、銃に素人とはいえ何も報告なしにやられるとは思わなかったからだ。

「い、一体誰にやられたんだ！」

ドクロの男はスキンヘッドの胸倉をつかみ怒鳴る

「だ、誰かは分らない！けどやられた奴ら気絶してるだけだから起きたらわかると思う」

「すぐにそいつら叩き起せ！やったやつ見つけ出してぶっ殺してやる！！」

「おちつけよ」

動揺の広がるなか、先ほどまでドクロの男と話していた男が言う

「俺には、だれがやったのかは分からないが、どこがやったかは分ってるぜ」

「お、おしえてくれ！一体どこのどいつがやったんだ」
敬語を忘れてドクロの男が尋ねる。

「『ホーク・トライアングル』さ」

男は先ほどまで被っていたテンガロンハットを脱ぎながらニヤリと笑う。

「ほ、『ホーク・トライアングル』」

「あの犯罪撲滅組織……」

「や、ヤベ　よ……」

周囲にいた男たちは口々に言いだす、ドクロの男も顔色が少々悪い、なぜなら『ホーク・トライアングル』に目をつけられた犯罪組織は必ずと言っていいほど壊滅、もしくはそれに該当するくらいの打撃を受けるからだ。

「おいおい、何ビビってんだよ、相手は少なくとも1人が2人くらいだ、それに俺もいる」

テンガロンハットの男は動揺する男たちに問いかける。

「そ、そうだ俺たちにはこの人がいし、こいつもある！」

ドクロの男が、テンガロンハットの男から貰ったプレゼントである「AK 107（グレネードランチャー付き）」を抱える。

「よくわかってんじゃねーか、安心しろ何かあったら俺が殺ってやるよ、ヒヤ　ハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

テンガロンハットの男は高笑いあげた、その笑いは曇天の空に響いて行った。

啓介は電車やタクシーを乗り継いで任務の開始地点である港に着いた。今回啓介に与えられた任務は、港を拠点にしている武器密輸を行うギャングチームの討伐、もしくはその武器の密輸先、密輸元をつきとめることだ。

「そんじゃま、ボチボチ始めますか」

啓介は港に入っていた。

しばらく歩いていると異変に気付いた。

（妙だな、いくら素人ばかりとはいえ見張り一人いないなんて……）
ヒップホルスターから「ベレッタM92F」をひきぬきコンテナの集積所へと向かっていく。

「ふむ、あのコンテナの見張りは2人か……」

啓介は迷路のように積まれたコンテナを抜けて開けた場所に出る、その場所は相変わらずコンテナが周囲を取り囲んでいるのだが、中央にある三つ並んだコンテナは周りのとは違い遠くから見てもサビ一つ着いておらず、重要な物が入っているという雰囲気をもしていた。

「まずは見張りを無力化するか」

入ってきた場所から近くにあった木箱に身をかがめながら啓介は呟く。

啓介は品定めをするかのように2人の見張りを観察する。

「よし、まずあいつからだ」

啓介の隠れている木箱の近くを歩いていたモヒカンの見張りに目をつける。

啓介はそのモヒカンに気付かれないように、周辺にある木箱やコンテナで身を隠しながらモヒカンの背後に近付き。

ガッン！！

銃のグリップで後頭部を殴りつけた。

バタッとモヒカンは倒れる、啓介はもう一人にばれないようにそつと引きずりながら運んで行く。すると、初めに隠れた木箱の近くに大の大人が1人入るくらいのダンボールがたくさん積まれていた。

啓介はそのダンボールを一つ取ると、モヒカンを中心に突っ込みほかのダンボールでカモフラージュする。

「ったく、こんなところにタイミング良くダンボールなんて配置しやがって、コードネームを蛇にしている眼帯の兵士が前に来たのか？」

啓介は、独り言をさみしく呟いた。

「さてと、次は最後の奴か」

並んでいるコンテナ周辺を歩き回っている見張りを最初の位置と同じ場所の木箱に隠れながら、腰に差しているナイフを鞘シースからゆつくりと抜く。

啓介の場所からコンテナにかけて距離は50メートルくらいで、走っていけば見張りに普通にばれてしまう、そこで先ほどと同じように途中にある木箱やコンテナで身を隠しながらゆつくり進むことを決めた。

「はあ、ホントに眼帯つけたダンボール好きのコードネームが蛇の奴みたいだ」

啓介は再びぼそりと呟いた。

そしてややあつて、見張りが歩き回っているコンテナのすぐ近くの木箱に行くことに成功した。

啓介は見張りの動きを観察し、見張りが啓介に背後を向けた瞬間。「うごくな」

啓介は木箱から飛び出し、見張りの首元にナイフを突き付け拘束した。ヒツと息をもらした見張りの首を腕で締め上げる。キュツと言つ声をもらし見張りは気絶した。

啓介はコンテナのセキュリティを開ける作業をしていた、暗証番号を入れなければ解除できない仕組みだったが、幸いにも暗証番号を解読する装置（桜田から持たされた）を使用し難なく開けることに成功した。そこで啓介の見た物は。

「え？靴ぞ」

靴底だった、それもスニーカーの、啓介は最後まで言えずにそのスニーカーで顔面に蹴りをいれたのだ。

「ぶべきや！！」

世紀末的な声を上げ3メートル近く吹っ飛んだ、まるで漫画のようだ。

「いてて……何が起き……！」

仰向けに倒れた啓介は喋るのをやめすぐにホルスターからベレッタを引き抜き蹴りをくらったコンテナの中に向ける。

コンテナの中から赤い色のポニーテールをした少女が啓介に銃を向けながら出てきた。

「ふーん反射神経はそれなりにいいようね」

これが龍崎啓介と水無月ユイとの初めての出会いだった。

第2話（後書き）

誤字脱字の報告や感想をお待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0425y/>

バレットストーリー

2011年11月17日17時53分発行